



「繁殖経営の足あと」



肉用牛経営：

水原町大字上江端 五十嵐 泰雄氏

私が繁殖経営（黒毛和種）を始めたのが昭和56年当時は草地も無い牛飼いのスタートでした。分娩まで色々と苦勞の連続でありました。第1の問題点は粗飼料不足が原因でした。そこで、昭和63年頃当町では転作大麦の貴重な資源がありましたので粗飼料に使ってみたのですが、嗜好性が良くないのでアンモニア処理したものを利用してみました。初めての飼料化の試験でしたが無処理に比べれば食い込みも上々でした。又、未利用資源の有効活用として河川の堤防のカヤ等の粗飼料も利用致しました。平成になって牛肉自由化などによる情勢変化もあり先行き不安でありましたが、自由化対策として草地造成を計画し、地域の酪農家3戸、和牛繁殖農家2戸で草地造成整備事業に取組み、昭和63年には飼料基盤整備事業の活用で約70ha達成しました。このことで、粗飼料確保が十分されるようになりました。当時年々強化される減反政策の中で転作田等を利用し粗飼料の百パーセント確保できないか検討したことが現在の基礎となっています。

繁殖牛については自家産が主でしたが、今後は優良牛を導入し生産性を高めていきたいと考えております。平成元年に設立したET協議会のET事業も大いに活用し成果を挙げたいと考えております。繁殖牛については基本的に1年1産を目標に努力して行くつもりです。ただBSE発生で枝肉価格や子牛価格の暴落で牛飼いがこれで終りかと思いましたが、国や行政の対応が速く出荷牛の全頭検査で消費者にいち早く安全と安心を提供する事で枝肉価格も子牛価格もほぼ回復し、まずは一安心と肩の荷を下ろしているところです。

稲作との複合経営ですが稲作を始め全ての農作物が価格低迷している中で畜産経営には、今までの経験を生かして繁殖経営を継続するつもりです。子牛生産履歴証明や個体識別耳標等は肥育農家に安心して提供することが出来ます。経営を取り巻く外部環境が厳しく課題は山積していますが、ひとつひとつクリアして健康である限り地域の畜産農家の発展に頑張りたいと思います。

『今 思うこと』



酪農経営：

岩室村大字湯上 藤田 泰子氏

私が非農家から嫁いで就農した牛舎は、自然の造形美が一望できる、山を開拓した中にあります。

もう築30年にもなります。自然と共生する環境にあって、四季折々の自然の彩りはとても詩情にあふれ、荘厳な光彩を広げています。

我が家の酪農経営の特色は、その広大な土地に子牛を放牧・育成していることです。

なので、春や秋には自然の恵みの山菜を探しに来る方たちで賑わい、自然の中にたたずむ牛をカメラに収めたいと来る方には、絶景の場所を案内したりしています。

話は変わりますが、主人で三代目となり代々受け継がれて来た、これからも継承されて行く酪農をどう発展させて行くか。

これまで義父は、時代の流れを先取りした酪農家を視察するなど、社会の動向にも鋭敏になって、真剣に模索しながら設備投資を行い、作業の合理化を図って来ました。

その決断力と行動力には目を見張るものがあり、尊敬の念を感じます。

そして今、主人の時代になって目指すところは、さらに開拓するぐらいの気概と懸命さで、牛の健康と生態を徹底的に考慮した上で、より一層近代化された酪農に近づくことです。

また、新風を吹き込むスタッフを入れて、新しい力で牧場を活性化させたいと思っています。

これからも主人と共に努力して、酪農に啓発的な、多様な角度からの視座が持てるように賢明な眼を養いたいと思います。